

〔論文〕

南吉の読書履歴

—昭和四年自由日記より—

滝浪常雄

名古屋学院大学スポーツ健康学部

要 旨

本研究は、新美南吉の読書履歴を明らかにしようと試みたものである。童話作家として多くの作品を生み出してきたわけであるが、その文学的素養、創作意欲、創作発想の源泉の一つに、彼の読書歴が大きく影響を与えたものであると考えている。本稿では、昭和四年の自由日記に着目してみた。彼が16歳の多感な時期のものであり、創作意欲にあふれた時期でもある。この時期、さまざまな書を読み、文学的素養が醸成されるばかりでなく、創作意欲を触発され、そして、創作の発想を得て、実際にいくつかの作品を手がけている。そこで、彼は何を読んで、どう影響を受けたのかを、明らかにすることが本研究の目的である。日記は「校定新美南吉全集」所収のものを用い、昭和四年の1年間を、日付ごとに小説、雑誌等を調査し、作品名、書名、雑誌名を分類した。彼がこの時期にどんな本や雑誌を読んでいたのか特定することができた。読後感想を記していることも多く、それから触発されて創作活動につなげていたことを明らかにすることもできた。

キーワード：新美南吉、日記、読書、読書履歴

Nankichi's reading record

—Based on the diary which was written in Syowa 4—

Tsuneo TAKINAMI

Faculty of Sports and Health
Nagoya Gakuin University

発行日 2024年1月31日

1. 問題の所在

南吉とは、言うまでもなく、宮澤賢治と並び称される童話作家、新美南吉のことである。彼の代表的な作品「ごんぎつね」は現在も小学校国語科教科書会社5社全てに掲載されている。小学4年生になれば、毎年9月、10月には全国津々浦々で、「ごんぎつね」の授業が展開される。

南吉は生涯に多くの作品を残しているのは周知のことであるが、安城女子高時代には、後世に残る名作を数多く生み出している。しかし、その創作活動は10代から始まっており、作品を作り続け、しかも日記やノートという形で残している。巽聖歌は「新美南吉十七歳の作品日記」の「とじめがき」において、「じじつ、十六歳、十七歳の二年間に、これだけの量を残している作家も、めったにないことにちがいない。」と記している¹⁾。

この時期の南吉の創作意欲は旺盛なものであり、「ごんぎつね」はその延長として19歳に書かれることになる。その創作の源泉について、考えればそれは様々な要素があったであろうと思う。本稿では、創作の源泉となった南吉の読書について考えてみたい。

2. 研究の目的

そもそも南吉にとって読書とは何であったろうか。上掲の中で、南吉は読書について以下のように述べている²⁾。

読書の第一義は、深みのある生活へ、わが生活標準を高めることである。(中略) 古の人は、天から授かった徳を、後世の人に知らそうとして書いた。いいかえるとわれわれの生活を深めようとしたのである。

読書は、深みのある生活を送るためのものであり、古人が徳を後世に伝えるものだと定義している。しかし、すべての本が徳を示しているわけではなく、要は読む態度次第であり、読む視点、観点をしっかり決めて読むことが重要であると述べている。以下の通りである³⁾。

世には徳以外の書が、木の葉ほどたくさんある。その書は、なんにもならないのか。けっして、そうじゃない。徳の知的方面、また情的方面を、豊富にする役にたつ。しかし、それには、態度が必要だ。(中略)「書を読めば読むだけとくのように思えるこのごろ」という歌を、ある物で読んでおぼえている。この態度である。この態度で書に対したら、われわれは、最も多くの収穫を、最も少い分量の書から得るだろう。

そして、この態度は非常にまじめである。

十七歳の南吉が、読書に真摯に臨む姿勢が感じられる。

では、実際に南吉は何を読んできたのか。文学的素養が醸成されていき、特に創作意欲旺盛な時期

の一つとして考えられる、この十代の南吉にとって創作の源泉となっていたのか、無論そればかりでなく、おそらく南吉の生き方にも大なり小なり影響を及ぼしていたことは事実である。

南吉の日記を読むと、読書の記録が多く散見される。購入もしたが、友人から借りることによって、多くの本や雑誌を手に入れ、毎日のように読み耽っていた姿が見られるのである。

そこで、本研究の目的を、何を読み、本や雑誌が南吉の創作活動にどのような影響を及ぼしたか、1年間の日記に記述されている本や雑誌をつぶさに拾いあげながら、明らかにしていきたい。

3. 研究の方法

本稿では、南吉の日記のうち、昭和四年自由日記に着目することとした。

「校定新美南吉全集」のうち、第十巻、第十一巻、第十二巻には日記・ノートが収められている⁴⁾。日記、ノートが多く残されているが、今回、昭和四年自由日記に着目したのは、上述したように、南吉は16歳、17歳に数多くの作品を生み出している時期であるということである。特に16歳時の昭和四年自由日記は毎日のように日記を付けており、今回は当日記を分析することにし、昭和五年の日記については後日分析の予定である。

分析方法としては、まず読書の記録を作成する。南吉が日記の中で「読む」「読み了る」「借りる」「借りた」「返す」「返した」といった表記を中心に、記述を拾いあげていく。以下が一覧表の一部である。(下線の直線波線ともに筆者)

番号	月日(曜日)	記述	頁段行	備考
001	1 / 2 (水)	(前略) 宇野浩二の「春告げ鳥」を読み <u>て考へ出した</u> 「酒」に <u>關する童話を書き出す。</u>	63上 13-14	春をつげる鳥
002	1 / 4 (金)	(前略) 午後、徳三君余の家に来る。漫談喋々。以前に彼より借りし漫談全集、少年文學集を返す。	64上 12-13	
003	1 / 6 (日)	(前略) 宇野浩治《ママ》作の「 <u>王様の嘆き</u> 」を読んで考へ出した。 (中略) 夜に入りて、花井仁六君より借りし小酒井不木集の「 <u>死の接吻</u> 」及び「 <u>肉腫</u> 」を読む。	65上 10 同上 17-18	
004	1 / 10 (木)	「つれづ草」の「 <u>名を聞くより</u> 」を読み兼行法師の頭腦の良いのに感嘆致しぬ。 (中略) 友人金次に「 <u>少年俱樂部</u> 」新年號を借りる。	67上 7-8 同上 17	

以上のように、1年間の記述を抽出して表にまとめた。

下線は書名や作品、雑誌名であり、波線は南吉の創作活動に関わっているだろうと思われる記述である。

次に、単行本、雑誌に大分類し、本稿では、単行本において、何を読んでいたか、昭和四年の1年間に記述された書名を特定した。書名や作家名が現代表記と異なるものもあるので、当全集における日記の解題⁵⁾と、国立国会図書館サーチの書誌情報を参考にした。備考に正式名を加えた。

特に記述においては(波線)、たとえば「(前略)宇野浩二の「春告げ鳥」を讀みて考へ出した「酒」に關する童話を書き出す。」であれば、明らかに読書対象の本から創意を刺激されたわけであるので、その記述部分を中心に、分析考察していく。

4. 南吉の読書履歴の分析

(1) 単行本と作品名(日記本文にある作者作品名の誤字脱字は修正した。)

分類	作品名(日付)	書名(日付)
単行本	<ul style="list-style-type: none"> ・宇野浩二「春告げ鳥」(1/2) ・同 「王様の嘆き」(1/6) ・小酒井不木「死の接吻」「肉腫」(1/6) ・兼好法師「つれづれ草」うち「名を聞くより」(1/10) ・小川未明「赤い蠟燭と人魚」「飴ちょこの天使」「月夜とめがね」「海ほゝづき」(2/4) 「知らないをばさん」「月と海豹」「赤いお船のお客」「兄弟の山鳩」(2/5)「湊に着いた黒んぼ」「二つの琴と二人の娘」「姉さんの後悔」「白い熊」(2/6) ・宇野浩二「西遊記」「水滸傳物語」(2/18, 3/19) (以下2/18) ・楠山正雄「世界童話集」(2/18)のうちトルストイ「イワンの馬鹿」ウィルヘルム・ハウフ「カリフの鶴」レオニード・アンドレーエフ「母親」アウグスト・ストリンドベルヒ「ピアノ」オスカー・ワイルド「わがまゝな大男」 ・小酒井不木：癩病を扱った作品(2/20) ・大佛次郎集「照る日曇る日」(3/20, 3/24) ・土師清二「砂繪の呪縛」 ・ハガード「洞窟の女王」「ソロモンの洞窟」(4/1, 4/25, 4/27, 5/12) ・菊池寛「眞珠夫人」(4/27, 5/8) ・谷崎潤一郎「痴人の愛」「少年」「鶯姫」(6/22)「信西」「兄弟」(6/23)「二人のちご」(6/24)或る少年の怯れ」「お國と五平」「人面そ」(7/8, 7/9) 	<ul style="list-style-type: none"> 子供漫畫(1/11) ・中里介山「大菩薩峠」(1/30) ・島崎藤村「日本童話集」(2/1, 2/8) ・澁澤青花「チベット童話」(2/2, 2/7, 2/13) ・小川未明童話集(2/4) ・探偵名玉集(2/5, 2/7) ・日本童話集(豊島與志雄, 楠山正雄, 浜田廣介, 宇野浩二, 村田雨雀, 鈴木三重吉共著)下線部をそれぞれ(2/8, 2/9, 2/13) ・グリム童話集(2/11, 3/2) ・村松梢風「大衆文學全集」(2/14) ・中村星湖「西洋少年少女小説集」(2/18, 3/2) ・楠山正雄「世界童話集」(2/18) ・森田草平「アラビヤ夜話」(2/19, 2/28) ・「ムツソリニ傳」(2/22) ・菊池寛全集(4/27) ・ギリシャ神話(5/17, 9/3) ・「南総里見八犬伝」(6/22, 9/4) ・吉田絃二郎(7/10) ・芥川龍之介集(7/23, 7/24, 7/25, 9/5) ・吉田絃二郎, 藤森成吉集(8/29, 9/24) ・譚海(9/16) ・ルパン全集(9/19, 10/11, 10/12) ・「谷崎潤一郎集」及び「久米正男(ママ)・近松秋江集」(9/25, 11/14) ・ドストエーフスキイの「罪と罰」(10/5, 10/12) ・新文藝日記(12/13)

南吉の読書履歴

	<ul style="list-style-type: none"> ・下村悦夫「悲願千人斬り」(6/26, 6/7/8) ・尾崎紅葉「金色夜」(7/23, 7/25, /7/28, 7/29)「多情多恨」(7/29)「二人比丘尼懺悔」(7/30) ・藤森成吉「若き日の悩み」(8/30) ・菊池寛「新珠」(9/5, 9/6)「結婚二重奏」(9/8)「第二の接吻」(9/9) ・吉田絃二郎「父」(9/9) ・藤森成吉「はりつけ茂左エ門」(9/17) ・吉田絃二郎「ダビデと子たち」(9 / 20)「芭蕉」(9/21) ・近松秋江「別れた妻」(9/27)「鶴舞心中」(9/30)「疑惑」(10/2) ・久米正夫「地藏教由來」, 長篇「破船」(10/3) ・ドストエーフスキイ「罪と罰」(10/5, 10/12) ・中村白葉譚 (10/5) ・吉田絃二郎「草光る」(7/1, 11/3) ・ブーシュキン「オネギン」(11/20) 	<ul style="list-style-type: none"> ・落語集(中)(12/21, 12/28) ・新興文學(12/29)
童謡集詩集	<ul style="list-style-type: none"> ・日夏耿之介「夜の誦」(5/4) ・カチューシャ(5/29, 6/25) 	<ul style="list-style-type: none"> ・子供の唄(マザーグース)(1/26) ・北原白秋の童謡集(1/29) ・小学児童の「自由詩集」(1/30, 2/1) ・廣介童謡集「小鳥と花と」(3/9) ・泣童詩集(3/17) ・西条八十の詩集(4/30, 5/1) ・全集 萩原朔太郎, 山村暮鳥(5/1) ・ワーズワース詩集(5/17, 6/7, 6/10) ・竹友藻風の詩集(7/23) ・春月詩集(10/28, 11/14) ・「バーンズ詩集」(11/20) ・白秋童謡集(12/15)
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・幾何の参考書(2/11) ・教科書12冊(3/24) ・岡田實麿「英語熟語要訣」(3/24) ・三省堂「小辭林」(3/24) ・コンサイス(4/9) ・「考へ方」(4/21) ・大阪朝日新聞 菊池寛「不壊白珠」掲載 ・小野圭次郎 英文法の参考書(4/25) ・「彫刻をする人へ」(4/25) ・山崎貞「英文法解釈」(5/20) ・詩の作り方研究(10/5) 	

(2) 雑誌名

分類	雑誌名(記述の日付)	掲載されている作品名
雑誌	<ul style="list-style-type: none"> ・「少年倶楽部」(1/10, 2/1, 3/28, 4/5, 5/8, 5/106/10, 6/13, 6/14, 7/25, 8/8, 8/9, 9/24) 	<ul style="list-style-type: none"> ・少年倶楽部 紅線「少年賛歌」邦「苦心の學友」幽芳譯「家無き子」大佛「山嶽黨奇談」(5/10)

<ul style="list-style-type: none"> ・「キング」(1/15, 1/24, 1/284) ・「平凡」(1/16) ・「サンデー毎日」(1/16, 2/12) ・「兎の耳」(1/18) ・「緑草」(1/20, 7/18, 8/2, 9/12, 12/16) ・「赤い鳥」(2/1, 2/16, 2/17) ・「映畫世界」(2/10) ・「朝日」(3/7) ・「金の星」(3/16) ・「新青年」(3/19) ・「良國民」(3/28) ・「愛誦」(3/16, 4/21, 6/27, 7/14, 8/12, 9/15) ・「日本少年」(7/12) ・愛國文壇」(8/2) ・オリオン (9/1) ・曙 (9/2) ・杠谷樹 (9/12) 計19種 ・現代 (12/3) 	<ul style="list-style-type: none"> ・キング「東京行進曲(菊池寛)」「新家庭雙六(佐々木邦)」(1/15) ・新青年「押繪の奇蹟(夢野久作)」(3/20)
--	--

(3) 南吉の読書傾向

単行本は児童書を含めて、実に多くの作品を読んでいることが分かる。特に小川未明や吉田絃二郎には回数や内容の詳細も多く、傾倒していたようである。童話が多いことも、この時期の創作には欠かせない存在だったのだろうと思われる。

雑誌を読んだり、書店で見かけたりすることも入ると、1年間で19種の雑誌に目を通してている。中でも「少年倶楽部」の記述は毎月のように書かれており、圧倒的に多い。16歳の南吉には、この雑誌が娯楽の一つであったことが分かる。また、日記を読むと、童話創作だけでなく、童謡を作っている記述がよく見られる。そのために、北原白秋、西条八十といった有名作家の童謡集や詩集、ワーズワース、マザーグースのような外国の童謡集や詩集を参考にしていることが分かる。特に「愛誦」は購読することに決めたとして、毎号楽しみにしていたようである。

さらに雑誌の存在は、南吉にとって投稿すべき対象でもあり、そのために購入している場面もある。ちなみにこの時期に「赤い鳥」は休刊になるということが書かれている。

小説群では、宇野浩二、久米正雄、芥川龍之介、菊池寛、谷崎潤一郎、大佛次郎、近松秋江といった当代の有名作家や、ドストエフスキー、トルストイ、プーシキン、オスカー・ワイルドといった外国の作品をかなり早いペースで読んでいる。長編作品もあり、16歳の南吉にとって、文学的な教養はかなり豊かであったことがうかがわれる。

その他の資料としては、英語学習に努めていたことが分かる。後に東京外語学校入学、英語教師としての活躍の基礎がここから形作られていることがうかがい知れる。

5. 南吉の創作意欲を触発した本

以下の一覧表が、当時の南吉の創作意欲をかきたてたと思われる記述のある部分である。

日付	日記における記述	頁段行
1/2	宇野浩二の「春告げ鳥」を讀みて考へだした「酒」に關する童話を書き出す。	63上 13-14
1/6	宇野浩二作の「王様の嘆き」を讀んで考へ出した。	65上 10
2/4	小川未明童話集の中で、「人魚と赤い蠟燭」「飴ちょこの天使」「月夜とめがね」「海ほゞづき」を讀むだ。感ずる所があつた。	79下 18- 80上 4
2/5	山口正吾君に「探偵名玉集」を借りた。「小川未明童話集」の中、「知らないをばさん」「月と海豹」「赤いお船のお客」「兄弟の山鳩」を讀むだ。「月と豹」は、大きな或物を私に與へた。童話を四つ考へた。	79下 18- 80上 4
2/6	未明童話集を讀んで了つた。今日讀んだ中で、良いと思つたのは、「湊に着いた黒んぼ」「二つの琴と二人の娘」「姉さんの後悔」「白い熊」だつた。「こだまと山猫」「白い小鳥の嘆き」の童話を考へ出した。	80上 18- 同下 3
3/10	ひろすけ童謠集を讀んで了つた。廣介の謠は、日本の里と云ふ事を思はせるものばかりだ。従つて、新しい香はしない。けれど好める作品だ、何遍も何遍も、余はこの集を讀まう。	95下 18- 96上 3
6/22	谷崎潤一郎の「痴人の愛」「少年」「鶯姫」を讀むだ。「痴人の愛」は一寸好いと思つた。俺も一つ戀愛小説を書いてやらうか。	135下 10-12
8/31	藤森の小説を讀んでると、童謠など書いてるのがつまらなくなつて來る。	159下 10-11
10/5	「罪と罰」！ 何かを獲得するぞ！	172下 11
12/14	夜、自分の囊中をはたいて、半田へ往つた時童謠集を求めて來た。愛誦や、若草や、令女界には、うらやましい様な詩が選ばれてゐる。童謠も。今夜杯、ひどく刺激された。	193下 18-3
12/29	歸りに釜をのせて。新興文學と云ふ書が古本屋にあつた。夜、「水車小屋の子」脱稿。この作は、幾分吉田弦次郎の感傷の影響をうけてゐる積。	198下 5-7

11箇所に創作意欲を喚起させられたものや、感想が書かれている。

たとえば1／2付の宇野浩二、2／5付と2／6付の小川未明の作品に触発されて童話を書いていることが分かる。また、12／29付も吉田絃二郎の影響を受けていると書かれている。直に発想を得

ている部分もあれば、12 / 14付では半田で囊中はたいて買った詩集に「ひどく刺激された。」と記述している。往々にして作品から想が浮かぶことはあるが、この時期の南吉にとって、創作活動を支えていく、重要な要素となっていると考えられる。

それ以外でも南吉は読書から、何かを学ぼうとする態度が見られる。2 / 4付「感ずる所があった。」2 / 5付「大きな或物を私へ與えた。」と学ぶべきものがあったことを記述している。10 / 5付では読む前に「何かを獲得するぞ！」と意気込んでいる姿勢も見られる。3 / 10付では濱田廣介の詩を「好める作品」として「何遍も何遍も、余はこの集を讀まう。」と、冒頭に記したように、南吉は読書を深みのある生活を送るためであり、真摯に何かを収穫するように読む態度が大切であると述べていた。これらの記述に如実に表れていると言える。こうして、文学的な素養も着実に養われていったのである。

6. 結語

南吉にとっての読書は、明らかに創作意欲の源泉の一つであり、発想を生み出す原動力の一つであった。特に童話創作には、小川未明や吉田絃二郎らの童話集から、童謡創作には、北原白秋や濱田廣介、西条八十らの童謡集や詩集が大きな影響を及ぼしていることが分かった。

また、雑誌群を見ると、南吉が常に文学界にアンテナを高くはって、当時の思潮や情報を得ていたことも見えてきた。創作活動にとって、当時の文学界の動きを、地方でできうる限りの情報を得るには、雑誌ぐらいからしか得られなかった時代であれば、それも当然の帰結かもしれないが、これは旺盛な創作意欲に裏打ちされたたまものであると言える。

童話集や童謡集以外にも、南吉は当時の高名な文学者たちの作品を数多く読みこなしていた。購入や借用によってほぼ毎日のように読書に耽る南吉の姿があったようである。彼の作品の背景には、豊かな文学的教養があったことは論を俟たないであろう。

今回、昭和四年の1年間の日記の分析ではあったが、創作活動にひたむきに向かう彼の姿を浮き彫りにすることができたのではないかと考える。文学的素養はもちろんのこと、創作活動への原動力となったことは事実である。今後は他の日記やノートからも、南吉は何を読み、どう自分の中に取り入れていったのか、明らかにしていきたい。

注

- 1) 監修長谷川泉「近代作家研究叢書141 巽聖歌著 新美南吉十七歳の作品日記」日本図書センター 1993.6.25 p 271 「校定新美南吉全集」発刊後に発見されたものである。
- 2) 上掲書 p 255 昭和5年9月15日付
- 3) 上掲書 p 256
- 4) 「校定新美南吉全集」第十巻 日記・ノートⅠ：「綴方帳，作文草稿帳，昭和四年自由日記，少年少女ダイアリー，文芸自由日記，スパルタノート」第十一巻日記・ノートⅡ：「メモ&日記，昭和十二年ノートⅠ・Ⅱ，見聞録，

南吉の読書履歴

備忘録, 昭和十四年ノート I ほか」第十二巻日記・ノート III:「昭和十四年ノート III, 安城勤務メモ, 昭和十六・十七年, 書簡, 画帖ほか」

5) 「校定新美南吉全集」第十巻 日記・ノート I p 206-216

主な参考文献

「校定新美南吉全集第十巻」大日本図書 1981.2.28 発行

巽聖歌 「新美南吉十七歳の作品日記」近代作家研究叢書141 監修長谷川泉 日本図書センター 1993.6.15